

(((シンポジウム)))

孤独に徹したブラームス

(話題提供) 村 田 武 雄

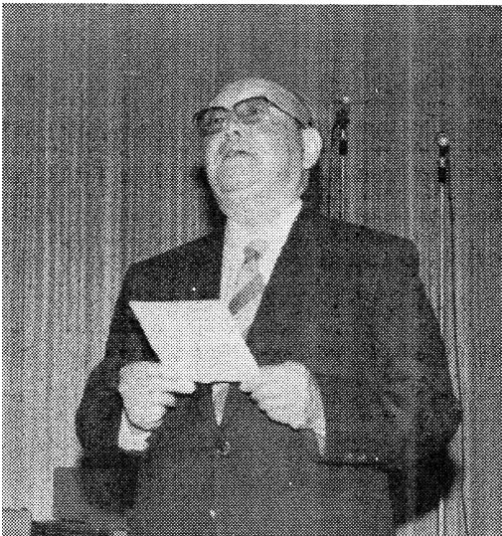
皆さん、ご機嫌よう。

私がヨハン・シュトラウス協会の役員をしていますことと、同じ協会の会員である坂本さんとのご縁から、日本ブラームス協会でお話をする事になりました。

ブラームスとヨハン・シュトラウスとは大の親友で、ブラームスがシュトラウス夫人に、ある時扇子に「青きドナウ」の主題を書いて、「残念なことにこれは私の作品ではありません」と言いながらサインをしたというくらいの仲よしの間柄でありました。

私もヨハン・シュトラウスと同じようにブラームスは大好きでして、好きというより、バッハ、ブラームス、ベートーベンの所謂三大Bは私にとっては音楽のすべてです。

ブラームスは日本では随分色々の意味で誤解されて来ましたが、また外国でも誤解されています。学者的なむづかしい、七面倒な音楽を書いたと言われています。



決してそうではないのです。ブラームスくらいユーモアのある、ブラームスくらい子供好きで、またブラームスくらい自分の趣味に徹した男はありませんでした。

伝記を読まれば解るのですが、全てブラームスは好人物の一語に尽きると思います。所が、時代の流れというか、ワグナーのような人間が現れてきて、そのためにワグナー対ブラームスという風な対立意識が生じて

きた。それにからんでうぞうむぞうが勝手なことを言っただけの騒いだものですから、ワグナー側からすればブラームスが何か才能のない人間のように思われる面がありました。つまりオペラを一曲も書かなかったブラームスを愚者のように考える人が居た。しかしそれはとんでもないことで、ブラームスは反対派が考えるような人物では決してありませんでした。

今日は時間もあまりないので、ここの設備をつかって、先ず皆さんに聴いていただこう、というより私自身が聴きたいと思った曲を一諸に聴いて、そのあと少しお話をしようと思います。

実は、もう亡くなったダヴィッド・オイストラフと私は奇しくも同じ1908年生れて、しかも9月30日と日も同じ。オイストラフは朝、私は夕方生れたのだそうですから不思議な因縁です。

彼はオデッサの人間で、戦後ソ連の芸術家として初めて日本にきました。そして新聞社から頼まれて私がインタビューして記事にすることになったのが最初の出会いだったのです。その時先ず「オイストラフさんは何の曲がお好きですか」と尋ねたところ、彼は即座に「ブラームスのバイオリン・コンチェルト、あんな立派なものはない、あれを弾いていると自分はバイオリンをやって本当によかったとつくづく思う」としみじみ言われました。それにひかれてという訳でもないのですが、私もこのバイオリン・コンチェルトがこの上なく好きです。それで今からそのオイストラフがジョージ・セル指揮のクリーブランド響と一諸に演奏したレコードをかけたいと思います。この曲はいかなれば交響曲対バイオリンの曲で、バイオリンを加えたシンフォニーと申してもよいと思います。その理由は何かということをご承知と思いますが、バイオリンが第一楽章でカデンツで入ってくるまでの機構そのものがシンフォニーだと言われております。この曲を初めに、そしてそのあともう一つ私にとって忘れることのできない曲としてアルト・ラブソディーを続けて聴いて頂きたいと思います。この曲の唱い手として、皆さんの中にはご存知ない方も多いと思いますが、マリアン・アンダーソンがおります。既に引退した人ですが、そのアンダーソンが日本にきましたとき、また新聞社の依頼でインタビューしました。そのときもまた「一番お好きな曲は？」と質問したのです。そしたら即座に「ブラームスのアルト・ラブソディー」という答がかえってきました。私も実はこのアルト・ラブソディーが大好きなのです。

以上の二曲を聴いた後で時間が許す限り、私の考えているブラームスについて話をさせていただこうと思います。

(ここでバイオリン・コンチェルトを聴く。要所々々で村田先生の懇切な説明がはさまれたが、紙面の都合で省略する。)

さてバイオリン・コンチェルトを聴きましたが、ブラームスの傑作はこれ一つに限ったことはありません。しかしブラームスはこういう人間だということを私はこの一曲で説明できると思います。

次にブラームスの人間性をよく表現している曲として、先程申しましたアルト・ラブソディー。これはアルトで唱われるのでこの名前がありますが、そもそもアルプスの一つの詩を音楽にしたもので、従って寒い暗い所の音楽の姿です。それを皆さんが頭において聴いていただきたい。詩はゲーテの作です。これはブラームス中期の作としてドイツ・レクェムと共に切り離すことのできない作品だと思います。

ブラームスは荒涼たる自然と申しますか、殊にアルプス地方の自然——オーストリア・アルプスでなく、アルプスそのものの自然——を心から愛しておりました。そして常にそれらを空想に描いていたのでしよう。ゲーテのこの詩を読んでなにか初めて心を打たれたに違いありません。そしてこの曲を作ったのだと思います。この曲は初めのうち全部ハ短調で進んでおりますが、やがて終りの方になってから、ハ長調に変わっています。つまりそこに人生の眼を開いた所を自然に託して表わしたのではないかと私は思います。このゲーテの詩は日本語にうまく訳せませんけれど曲を聴きながら私の未熟な訳をきいていただいて一諸に味わって頂きたいと思います。私が何故それをブラームスの作品として重く見ているか、ですが実はマリアン・アンダーソンが日本にまいりました時にこれを東京で唱いました。私は非常に感動しました。そのあと彼女が帰国してから、モントウの指揮でサンフランシスコ響とこの曲を入れたのでそのレコードを私に送ってくれたのです。ところが誠に残念なことにそのレコードが何故か紛々にこわれて届いたのです。それでそのレコードが日本で発売されるのを心待ちにしていたのですが、しばらくして出ました。私はそのレコードのアンダーソンを聴いてまた大変心をうたれました。それは自然対人間と申しましょか、ブラームスを考える場合、自然を忘れてはその音楽はよくうけとれませんが、正に荒涼たる自然を背景としてブラームスの気持を表わしたもので、それをゲーテの詩に託したと言ってよいのではないのでしょうか。クリスタ・ルード

ヴィヒという歌手が居ますが、この人もこの曲が非常に上手で、この曲をブラームスの代表作のように素晴らしい、とよく唱っております。前にも言いましたように初めのハ短調の部分は荒涼たるアルプスを想像していただいたらいいのではないでしょうか。

(しばらくアルト・ラブソディーを聴く)

終って……………

誠にいい曲です。ブラームスというのはこういう人だったのですね。色々の曲を作ってはおりますが、この曲のようにゲーテと結びついたドイツ人の考え方というのが即ブラームスの心ではなかったか、と私は思っています。

ブラームスを私は色々の意味で好きなのですが、さてどういふ点で好きなのかを少しお話ししたいと思います。これは村田自身の考えだと思ひになって、ひとつ皆様のご参考にして頂ければと存じます。

先ずブラームスは歌劇を作曲するのは結婚するよりむづかしいと申しました。これは本当に至言だと思ひます。事実オペラを一つも書かなかつた。ブラームスはオペラを書く技術を知らないから書けないんだ、とか言われたそうですが、とんでもないことです。おそらくオペラもブラームスは書きたかつたのでしょう。しかし彼の心の中にはやはりシューマンがあり、そしてクララ・シューマンが居たのでしょう。そうしますと成程結婚するよりむづかしいことで、シューマンがブラームスにオペラを書きなさいとすすめる道理はありませんから。したがってこれはブラームスにとって一つの苦しみであつたと同時に救いでもあつたのではないかと思ひます。第2にブラームスは孤独を愛しました。私ももう70才を大分越しましたが、今になって孤独というものをしみじみと感ずることが多くなりました。やはり孤独はよい、淋しいものではないということが解つてきました。では何故ブラームスが孤独を愛したかと申しますと、彼はこう言つてます。「自分が生一本に生きられるからだ」と。私自身どうやらそれが解つてきた気がします。ブラームスに対して「孤独の哲人」というのが一番適切な言葉ではないかと思ひます。

それから第3番目にブラームスが言うには、音楽は音そのものが表現であつて、それ以外にはないのだと。音楽で何を表現するかというのでなくて、自分の書いている音が全て表現であり、内容なんだと申しております。それこそ音楽の精髓です。したがって私共は音だけの世界で全てを解釈して行けばよろしいので、それに言葉

がついておりましたら、音としての言葉が問題であって、言葉の意味は第2、第3のことだと思えます。ですから歌を聴いて、意味が分らなくては音楽が分らない、またオペラを見ていて、言葉が分らないから面白くない、と申しますが、それは音楽を聴いているのではなくて形や劇を見ているからです。音楽は音そのものが内容を語っているものなのですから、音だけが全てを支配するという考えを持たなければいけないと思えます。それから、ブラームスの嫌いだっということが2つあります。それは伝記等でご承知のことと思えますが、一つは偽善であり、も一つは軽薄ということです。ブラームスは偽善を嫌って、そのことで仲間と喧嘩をしたこともありました。また自分が軽薄になることを常に警戒していました。軽薄の反対は重厚ということかも知れませんが、ブラームスは必ずしもそうは考えてはいませんでした。軽薄な内容とは誇張であるとか、無意味に飾ったりするというのではなかったのでしょうか。

それから、ブラームスは「お前はロマン派でありながら古典主義者だ」と言われましたが、それには強く刃向いました。ブラームスは「古典とロマンと何処が違うのだ。それは時代の区別ではないのか、私は古典とかロマンとか、そんなことの中で生きているのではない」と言ったそうです。これは誠に立派なことで、中々言えない言葉です。現代の人は直ぐ私は解放主義だとか、何々主義だとか申しますけれど、ブラームスの時代はそうでなかったのかも知れません。そういう時代でしたから、彼が古典主義だ、ロマン主義だ、と言われることに対して心の中で怒りを感じていたのでしょう。ブラームスは決して幸福な人間ではなかった。小さい時から酒場でピアノを弾いたりしていました。そういう中で何よりも好きだったのが聖書でした。聖書を手から離れたことがないというくらいでした。ブラームスは自分の心の中にないものを常に求めているところがありました。たとえば、バイオリン・コンチェルトの終楽章にハンガリーのジプシー風のものをもってきています。ハンガリーが好きということの裏には心の中にないものを何とかして引出して来たいと思気持があったからです。ですからブラームスの言うには「私はヨアヒムを愛し、リストを愛し、シューマンを愛する。」と。このようにブラームスの音楽にはいつも何か求望するものがあるように思います。その満ち足りてないものを一生懸命に追い求めて作曲していたようです。ブラームスの曲を考える上で私はこのことを一つのポイントにしております。ですから今のコンチェルトでも終楽章に何もジプシーを採

らなくてもよさそうなのに、実はそうでない。それが彼の心の中の間隙を充す何かであったのでしょ。これはブラームスを聴き、且考えて行く上で必要な問題ではないかと思ひます。

それからワグナー対ブラームスのことですが、これは音楽的には色々の問題があります。ワグナーも立派な楽劇の作者、作曲家でしたし、ブラームスは交響的な、つまり言葉を除外したいわゆる純粋な音楽の世界で活躍した人です。そうしますと、ワグナー対ブラームスということは要するに思想の面というより、むしろ言葉対音の問題だということになります。

ブラームスは歌を沢山書きました。それなのに何故オペラを書かなかったのだろうか、色々考えられる点はありますが、私はワグナーとブラームスとは実は非常に近い存在だと思ひております。近い存在ではあるけれどもそれが一致されないという所、これが音楽の歴史であります。過去から現在まで、いわゆる中世からルネッサンス、バロック、ロココとその時代時代でこのようなワグナー対ブラームスの対立がありました。そして解決できないままに進んできました。そこで言えることはワグナーの音楽もお聞き下さい、ブラームスの音楽もお聞き下さい、そうして自分でお考え下さい、ということです。それが芸術上の大きな問題です。

ブラームスは独身でした。クララ・シューマンを心から愛していましたが結婚には至りませんでした。クララが死にました時に、その墓に行つて涙を流して結婚できなかった自分の真意を告げたと言われております。それは別としても、ブラームスは人間生活に対して自分というものを外に出すことが大嫌いだったので。服装も大変無頓着で、ネクタイ、カラー、カフスなどしたことがないというくらいです。ブラームスの鬚が立派だったので、人がそのことを言うと、「私はネクタイやカフスの代りにこれをくっつけているんだよ」と言つたそうです。おそらくそれが彼の本心だったのでしょ。一方ブラームスの好きなものが二つありました。音楽とは別のことで笑い話に属するのですが、葉巻とお酒でした。煙草は葉巻ばかりで、しかつちゅう喫つていました。お酒の方は飲み過ぎて肝臓を悪くして医者から禁じられました。そのときお酒を飲めないなら死んだ方がましだと言つたそうです。誠に正直で、ブラームスは煙草とお酒とは自分の生命をかけて愛したと言つていいでしょう。

話は変わりますが、ウィーンでリント・シュピラークという食べものがあります。

日本でいうと牛井のようなもので、私が食べた今のリント・シュピラークは牛井でなくて牛皿でした。ブラームスはこりリント・シュピラークが大変好きで、牛井の人であったといってもいいのです。ブラームスはそういうものを食べて、生活の中で孤独感を味わい、少なからず淋しさを感じていたのでしょう。飲みたい酒も節し、煙草もひとり喫っていなければならぬ。食事もひとりぼっちで今言ったようなもので済ますという淋しさは恐らく一生の終りまで変らなかつたのではないかと思います。ですからブラームスの音楽の内容の一つは、さびしさに徹した孤独という以外にはありません。ブラームス研究会である皆様はこのことを念頭において孤独の美というものをブラームスから引き出していただきたい。室内楽、声楽曲、ピアノ独奏曲と沢山ありますが、それらを通じて感ずることは孤独の哲人的なもの寂しさです。人が何と言おうと彼自身自分一人で生一本に生き抜いた人間ではなかつたかと思ひます。それがブラームスの音楽であり、同時に他の作曲家の音楽とは異質のものにしている点ではないかと思ひます。ベートーベンとも、バッハともちがう。そのブラームス固有の美しさというのは孤独の美であり、生一本に生きる力の美しさで、この2つの美がブラームスの音楽を作っているのだと思ひます。私は何時もそういう気持で聴いていますが、皆さんもいづれ齢をとられるとそれを感じて来られると思ひます。私もそろそろそれを感じるようになって来ましたので、ブラームスの音楽が一層身に沁みてまいりました。皆さんもそういう点を汲みとって孤独の美、つまり寂しさと力というものをブラームスから引き出していただけたら私も一諸できるのではないかと思ひて今日お話しした次第です。聴いていただいた曲は既によく承知のものばかりでしたが、先程のオイストラフ、そのオデッサの彼の家を私は是非訪ねてみたかったです。しかし、その旅行のとき私のビザにはそこを訪ねるべき指示がありませんでしたためにオデッサまで行きながら駄目でした。彼は私と同年でありながら63才で世を去ってしまいました。でも私は彼の遺跡を訪ねてみたいと思ひております。そのオイストラフは日本に来た際、日本を非常に好みまして、日本はものが豊かなものですからレコードなど何枚も買って帰りました。初めて彼に会ったとき、私のうしろにノ連の軍人が2人立っていて、通訳を通して私が質問しますとオイストラフは先ずその監視人の顔を見て、そしてOKの合図があると答え、そうでないとノーコメントでした。その後数年経ってまた参りました時にはそういうこともなくなりました。話も自由にでき、食事は一諸にできま

した。終戦後ソ連人が初めて来たときはそんな状況でした。

それから2番目に聴いていただいたマリアン・アンダーソン。この人は黒人ですが、彼女もやはり日本が非常に好きでした。ところが日本の気候が彼女の声に合いませんで、喉を悪くしてしまいました。私がインタビューをする約束で彼女の泊っていた帝国ホテルに行ったところ、彼女は部屋のドアの所まで私を呼びまして、実は私のノドは今日は何もしゃべってはいけない、と言っている。というのは明日の演奏会で唱えないと大変なことになる。だから折角貴男を招んだけれど勘弁して下さい。」と言って別れましたが、ふと見ると、その時彼女は一生懸命破れた靴下を編みつくろっておりまして。私はハッと行って「あなたはそんなことまでなさるのですか」とききましたら、「私は自分のものは全部自分で縫いますし、人のためにも縫って送ったりします。」と言っていました。マリアン・アンダーソンとはそういう声楽家で、これがアメリカに於て何万人もの前で歌う芸術家かと思うくらい素朴で、やはり何か孤独に徹した人間に思えるものを持っておりまして。それで、この人のアルト・ラブソディーはほかの誰にも唱えないものと大切にしております。私は12、3年前から毎年ヨーロッパやアメリカによく出かけております。長い期間は無理ですけど、今年もついこの間ヨーロッパに行つてまいりました。この齢になって何故出かけるのかときかれますが、それは音楽も歌舞伎と同じように歌舞伎座によって成立していることと関連があります。歌舞伎座で観る歌舞伎とニューヨークで観るそれとは大変ちがうものだと思います。皆さんがウィーン国立歌劇場で、或いはパリのオペラ座でオペラをご覧になると、東京で観るのとでは、唱う人も指揮者も同じであれば本来同じであるべきでしょうが、ところが大変ちがうのです。何が違うか、それは違う劇場で違う状態のもとに接しているのですから、私自体がちがっている。芸術というものはその芸術のある所で受けとるべきものと思います。レンブラントを東京にもってきて、或いは複写で見て、ということはあくまで仮の事です。本当のことはそこに行って、その絵の前に立って味わうべきものです。それが芸術の真髄にふれる道ではないかと思ひますし、それが私の毎年出かけます理由の一つです。それとたった一人で汽車にのり、飛行機にのって自分を考えてみる、その孤独を実際の状態に移してみるという、それが私の喜びの一つです。寂しさであると同時に喜びでして、その2つのために出かけるのです。

先だってパリオペラ座でパルシファルを第3幕だけで見たのが観たのですが、

カラヤンは腰を打ってからひどく弱っていました。それでもやはり非常に努力し、苦しんで音楽の世界を開きつづけているのだということがよく分かりました。また音楽のことでないですけれど、アムステルダムなどに行ってみて、運河は汚いし、一流の劇場の椅子のヘリが破れていたりして、何かヨーロッパは今混沌としている感じがしました。経済のことはよく分かりませんが、中心を失ったといえますか、一寸異常でした。それだけに日本のよさをつくづく感じました。何と日本は美しく、いい国だと考えた次第です。皆さんも時々海外に出て日本を見てみるとよいと思います。音楽も直接現地で接し、味わってくるということはレコードでも、また日本のステージでも達し得ないことです。音楽そのものは変っている訳ではありませんけれど、それでも違うということが解ると思います。私は考えますに、音楽というものは結局私自身、皆さん自身のもので、それはとりもなおさず先程来申しました「人間の孤独」に徹した美しさといえるでしょう。音楽を聴くのに人に相談しながら聞く人は居りません。皆銘々で聴いているのです。そのように独りで聴いていることが孤独の美に徹している事実です。ですから皆さんに言いたいことは、どうぞご自分自身で音楽の美の世界を作り出して行くのだ、ということを充分お感じになって下さい。ブラムスなどは特にその必要があると思います。

私はバイオニアの松本さんという会長と一諸にヨハン・シュトラウス協会というのをやっております。目下の所は貧相な協会ですが、色々発展策も考えております。皆さんもブラムスがお好きならば、ヨハン・シュトラウスも愛していただけると思いますので、私共の仲間に加わっていただければと思いますし、また私たちの仲間もご推薦したいと思います。

本日は何となくまとまりのないお話を申し上げましたが、私の心の底には上記のこともありましたので、よろしくお汲みとりいただきたいと思います。どうも有難うございました。

終

本稿は56・6・28(日)、東京文化会館の鑑賞室で行ったシンポジウムでの村田先生の講演を記録したもので、先生にはご多用のところ、快く私たちの要望にこたえてお話し下さったことに御礼を申し上げる次第である。

(まとめ：松尾、坂本)